

第19回aaca建物視察会2025 —奈良・三重地区

開催日:2025年12月5-6日
場所:奈良県・三重県各所

会員交流委員会

建物視察会2025では、古都奈良と三重県の伊賀地方を巡りました。松隈章ディレクターの「普通の観光旅行では訪れない場所を巡ります。」の発声で始まった視察会でしたが、バスと徒歩で巡る旅は建築そのものだけでなく周辺環境との関係性、特にスケール感の秀逸さに感銘を受けた旅でした。

株式会社三輪山本 本社(設計施工 竹中工務店 狩野忠正)

近鉄奈良駅に10時に集合してバスで向かった一番目が1717(享保2)年創業の素麺店。1983年竣工の現本社は、深い庇の瓦屋根が盛りの紅葉に映えて美しい。フルオープンガラス越しに前庭の紅葉を眺めながら、佐藤可士和さんがパッケージデザインした商品が並ぶエントランスを通過して食堂へ。繊細な感覚で統制された空間に座って創業300年の味を堪能しました。エントランスから出て敷地の奥へ進むと配送用の大型トラックが入庫する倉庫棟。高さもスパンもちがう棟を瓦屋根で連続させて自然につないでいる。倉庫等の圧迫感を感じないどころか大型トラックが入ってくる場所であることにも気が付かない建物とその配置、外構計画のスケールの操りに脱帽。



異なるスケールが出会う中庭

奈良ホテル(辰野金吾)

樹木に囲まれた敷地の中はバスがようやく通れるほど。玄関前に到着すると旋回してキャノピーに半分おさめて停車。日常目にしては都心の道路とバスのスケールが木造建築の玄関先におさ

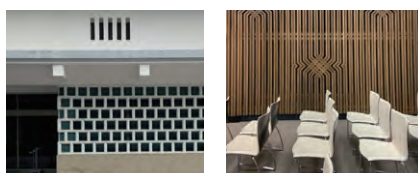
まって時代を超えて異なるスケールが交錯する感覚。車のスケールを包み込んで人と共存するあり方を見た気がした。寺社建築とは異なる木造の醍醐味を感じられる100年建築。歴史の積み重ねは建築のありようを様々なエピソードとともに手慣れたガイドがユーモアとともにたっぷりと紹介してくれて堪能。



木造によるホテルロビーのスケールコントロール

大和文華館(吉田五十八)

開館50年を迎えて2010年に大規模に改修されたが、特徴的ななまこ壁の奥に緑青色が映える外観は美しい。抽象的なファサード構成に俗世間のスケール感から離脱した感覚を味わう。アプローチするときに見上げる高揚感と相まって環境との調和のあり方が独特で、このごろ見失っている感覚を覚えた。駐車場にある文華ホールは奈良ホテルのラウンジの一部が移築されたもの。そこにあることの所以が語られ、地域で保存していくことの大切さと有効性を実感した。



アプローチ 外壁意匠 会議室の壁面

松伯美術館・佐伯邸(村野藤吾)

上村松園・松篁・淳之三代にわたる作品の紹介と日本画の普及、作家の育成を目的とした松伯美術館は、村野建築のなかでもスチールとガラスとタイルが絶妙のバランスで構成され、館内に明るく光が取り入れられて建築と日本画のテイストが調和する環境であった。外部に飛び出たガラスのエントランスや階段室が「こっちへおいで」と招いているようで、中に入ると中央にミュージアムショップのある内部と外の中庭空間が連続する。まるで美術館という空気を建築が軽く包んでいるような感覚である。作品を鑑賞する時間だけでなく館内のどこの場所も立ち止まって時間をすごすことの心地よさを感じる建築であった。

故近鉄名誉会長 佐伯勇の旧邸は木造建築を学ぶ教科書ともいえ、細部意匠や材料の説明にはどれだけ時間があっても足りず、バスに乗ったときはすっかり日が暮れていた。



中庭とロビーを包む、スチールとガラスの構成

奈良国立博物館 旧館(片山東熊)・西新館(吉村順三)

都心部の東側に広がる広大な奈良公園は道路との間に塀や柵などはなく、鹿が自由に行き来する風景は道路を走る車がはなはだ邪魔に見えるほどに他では味わうことのできない空間と時間の広がりを感じる。奈良県庁から東に歩いて緑地の奥に博物館の旧館が見えたときにはまるで古代の風景をみているような錯覚におちいった。ファサードにレリーフや彫刻がないのは、建設中に発生した濃尾地震によって耐震性を高くす

るために予算をまわしたためと視察会ならではの説明を聞くことができた。仏像館と呼ばれる旧館の天井が高いエントランスに展示された金剛力士立像は、空間ヴォリュームと相まって圧巻であった。近年の改修で設置された天井のルーバーは、フレンチルネサンス様式の建物構成と仏像のスケール双方と調和するスケールの検討に苦労したことが想像される。

吉村順三設計の西新館は校倉造を模した構成で水平に長く伸びるプロポーションが威圧感を抑えている。ガラス張りの1階は周辺環境と視覚的につながり、中央に設けられたおおらかなスロープでゆったりと館内を巡ると古代の時間感覚にふれた気がする。



していった人も懐かしさを感じるができる環境が整えられ世代を超えて記憶につながる装置となっている。減築によって不足する面積は木造平屋の森館で補われ、生徒が一人ですぐすことでもできるやわらかくてあたたかい環境がつくられている。生まれだての牛を見学できた敷地内では、同じく野澤事務所設計の環境性能の高い寮が工事中であった。



森館

旧上野市庁舎 SAKAKURA BASE(高野洋平+森田祥子/MARU. Architecture)解体・建て替えか保存かで紆余曲折あった坂倉建築が図書館・ホテルに改修・保存された。スチールとガラスのスケールと

調和するコンクリート打ち放しの部材や壁の表情が丁寧に保存され、優れた近代建築と久しぶりに巡り合えた感慨深さがあった。閉じた空間である議場は学習室として利用され用途として厳しい印象も否定できないが、ここでも完成された近代建築の内部空間を存分に楽しむことができた。工業的でありながらもヒューマンスケールであり人が接する部分の肌理がなじむ印象は現在の工業製品から感じる冷たさとは無縁のものであり、この建物全体が建築感受性装置としてこれからも長く使われることが期待される。

俳聖殿(はいせいでん)(伊東忠太)

2日間の旅の最後は松尾芭蕉の生誕300年を記念して1942年に建てられた俳聖殿。芭蕉の旅姿を表現しているそうだが、伊東忠太らしい奇怪さを感じる。漂泊の歌人である芭蕉の永住の場所という難問への答えだろうか。

(NTTファシリティーズ 石原智也 [法人会員])

*朝日新聞の取材記事「古都に残る近現代の名建築」
<https://www.asahi.com/articles/ASTDK1PP4TDKPOMB00BM.html>



旧館(上)と西新館

愛農学園農業高等学校本校舎・森館(小谷校舎)(野沢正光建築工房)

古都奈良から山を越えた山村風景のなかに全寮制の愛農学園はある。暮らすということはたくさんのいのちと生きていくこと。そのために必要な要素が農業・食・人・聖書であり、一学年25人の少人数で全寮制、持続可能な農業を実践しながら学ぶ場所である。耐震性が低いことから建て替えを考えていたRC3階建ての本校舎を2階建てに減築しながら環境性能の向上と木質材料を使うことで時代に適応させて残した。これまで卒業



旧上野市庁舎外観(上)と図書館



俳聖殿前での集合写真